

## 点字で異文化体験

著者	広瀬 浩二郎
雑誌名	博学連携ワークショップ「学校と博物館が学びあえる場の構築をめざして」 報告書
ページ	32-33
発行年	2011-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4812">http://hdl.handle.net/10502/4812</a>

# 点字で異文化体験

国立民族学博物館 廣瀬浩二郎



図1

10班メンバー： 伊藤泉美、大塚朋世、高田佳直、竹越のり子、山田美知子、廣瀬浩二郎  
校種・学年： 小学校・4年生  
教科・領域： 国語・  
単元： 手と心で読む  
選んだテーマ： 点字  
取り上げた資料： 点字器、さわる絵本  
授業タイトル： 楽しい点字

①目標： 現在、小学3-4年生用の国語教科書の多くで点字が取り上げられている。「手と心で読む」は、そんな教材の代表例である。国語、あるいは総合学習の時間で点字の基礎を実習したり、視覚障害者の体験談を聴く授業を行なう学校も増えている。だが、従来の授業では福祉や「心のバリアフリー」などの観点から点字にアプローチするケースが大半である。本授業計画では「点字で異文化体験」をテーマとし、日常的に“見る”文化に親しんでいる小学生たちに、“さわる”文化の楽しさと豊かさを伝えることを目標とする。点字学習は人間の生き方の多様性に気づくきっかけともなるだろう。

②導入： まず「街中にある点字を探そう」という課題の下、小学生たちに身の回りにある点字サインの例を挙げてもらう（駅の券売機、ポストやタクシーのシール、ユニバーサル・デザインの家電製品など）。ここでは規則正しい点の配列で文字を表す点字が、デザインとしても美しいことを強調し、小学生の好奇心を引き出す。次に一覧表を配布し、点字を解説する（点字表示が入った缶ビール、ドレッシング、ソースなどを事前に集めておく）。小学生が暗号を読み解くおもしろさを共有し、無理なく点字のルールを発見できるよう指導することが望ましい。

③展開： 点字は6個の点の組み合わせで仮名、数字、アルファベット、種々の記号を表現することができる。「少ない材料から多くを生み出す創造力」が点字の最大の特徴といえる。点字の奥深さを小学生が理解するためには、実際に手を動かして点字を書いてみる体験が重要である。「点字で名刺を作ろう」という課題の下、一覧表を確認しながら点字板で自分の名前や学年を書く練習を繰り返す。ここでは点字が右から左へ書き、左から右へ読む文字であることをわかりやすく説明する。例文を示して、視覚文字と触覚文字の相違にも言及したい（濁点の扱い、仮名遣いなど）。なお、点字板は地元の選挙管理委員会や福祉センターから借りることができる。

④発展： 点字学習の総仕上げとして民博を訪問する。課題は「博物館で点字にさわる」。民博の言語展示コーナーでは、世界の多種多様な言葉と文字が紹介されており、その中の一つとして点字も位置づけられている。具体的には、さまざまな言語で書かれた『はらぺこあおむし』の絵本が収集されていて、点字を併記したものも11冊ある。外国語が6点の組み合わせで書き表せること、各言語に対応する点体系があることを知るのには、小学生にとって新鮮な驚きだろう。音声言語（喋る言葉）に対して手話（視覚言語）があるように、“見る”文字に対して“さわる”文字が存在する。もちろん、両者には優劣などない。博物館の展示を通じて文化の多様性を実感することが「点字にさわる」意義といえよう。

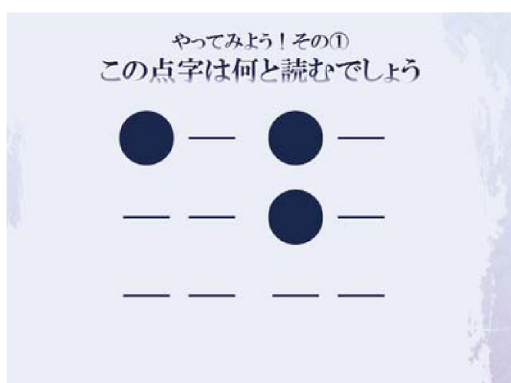
⑤結論： 点字とは一つずつ点を正確に打つことにより文字、そして文章を作る通信手段である。“見る”文字と比べると読み書きに時間がかかるし、フォントを変えるなどのバリエーションもない。しかし、ゆっくり大切に心を込めて文字を書くことは、コミュニケーションの原点である。“見る”文化の便利さ、すなわち「迅速かつ大量」という価値観に知らず知らずのうちに囚われている小学生にとって、“さわる”文字との出会いは自己の生活を見つめなおす貴重な機会となるに違いない。



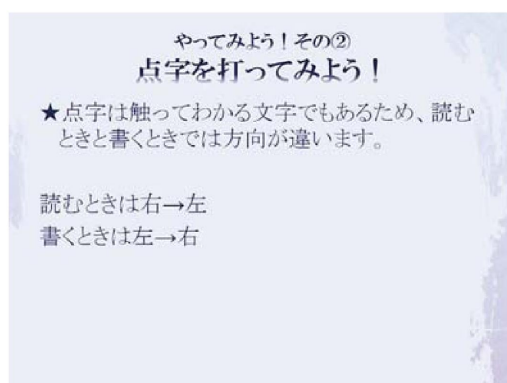
スライド1



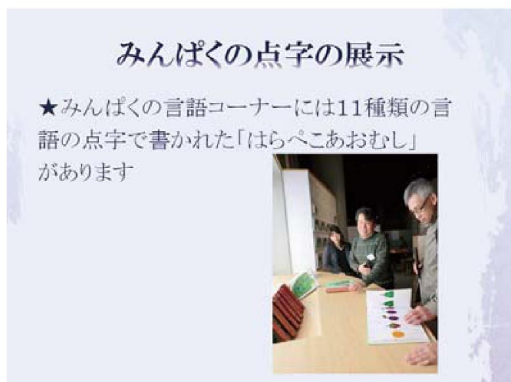
スライド2



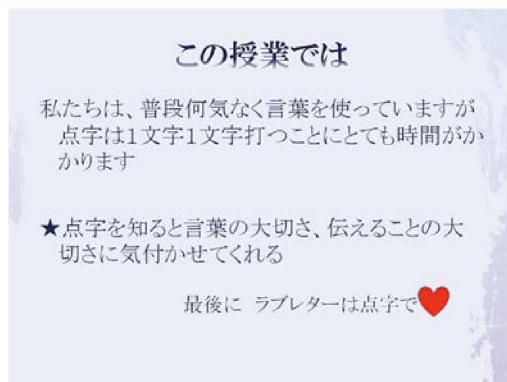
スライド3



スライド4



スライド5



スライド6